

敦煌本地獄文献管窺

—併せて莫高窟の性格を論ず—

金岡照光

タイトルは、「敦煌本地獄文献管窺」と致しました。本当にこれは、管から窺っているに過ぎない小さい問題しか御話し出来ないとthoughtたからです。この問題と同時に敦煌莫高窟の性格についても少し、申し上げてみたいと思います。実は、本来私の関心を持つておりますのは、地獄の文献・地獄の図像というもので、これらは中国では民衆の仏教として、極めて深く定着しておりますので、それに興味を持つたということが、今日の報告の一つの出発点でも御座います。

同時にまた地獄の文献を検討することを通して皆さま御案内の敦煌の千仏洞というものが、どういう性格を持つておるのかということを考えて見たい。千仏洞の性格については元来疑問に思っていることもあつたものですから、地獄文献を手掛かりと致しましてこの点にアプローチしてみたいと思つたわけです。そういった問題意識から出発しているので、主として現象的なことばかり申し上げる結果になると思いま

すが、その点は、御了承頂きまして、併せて後ほど、又、色々と御教え頂きたいと存じます。なお地獄の文献を扱います以上、これは、中国の場合には当然のことながら仏教文献だけでは不足として、道教文献というものとの密接な関係を抜きにしては、考えられないわけで御座います。所謂、仙仏習合と申しますか、或いは仏道混合と申しますか、特にすでに二世紀以来より、そういう傾向が、極めて顕著に現われてまいりますので、中国人の中に於ける地獄像というものを見ようとした場合には、道教との関係、絡み合いを意識しなければならない。唯、今日それを申し上げておりますと、問題が拡散してしまい、焦点が絞りきれなくなると思ひますので、今日は道教の文献は、必要に応じて、若干触れるかもしれませんのが、主題としては、採り上げないということに致します。

尚、又、地獄思想は、当然淨土思想と一体の関係にあるわけで御座いまして、インド仏教から、更に西域を通つて、そ

して中国に定着する迄の淨土思想移動のプロセス、そして中國に於ける独自の展開をも見てみなければならぬ。しかし私は、インド仏教教學に関しましては本当の素人で御座います。これにつきましても深くは立ち入らないことに致します。これは、先生方、御専門の方が多いと思いますので、敢えて申し上げる必要はない存じますが、御手元のプリントのNo.5の所に、従来中国の地獄觀地獄像というものの研究を中心とした或程度一般的研究に就きましたが、ほんの僅かでは御座いますが、挙げさせて頂きました。（ただ雑誌掲載論文は省略致しました。）

沢田瑞穂『地獄變』（一九六八・法藏館）山辺習学『仏教に於ける地獄の新研究』（一九三二・春秋社）眞鍋広濟『地藏菩薩の研究』（一九五〇・三密堂）岩本裕『地獄めぐりの文学』（一九七九・開明書院）etc。

特に例え、岩本裕先生の御著書のようなものは、インドから更には西域、特にイラニック、ペルシャ、そりいつたものとインド思想との習合、或いは中国への伝播といふことに関する、かなり詳細な、又、斬新な分析をしておられますので、そちらの方に御関心のお有りの方は、それらを一つの叩き台として、更に別の面に御自身の問題を御進め頂ければと存じて、省略させて頂きます。

私が、採り上げましたのは、先も、申し上げましたように

民衆の中に地獄觀というものが、中国ではどの様に育つていったか、という関心。もう一つは、敦煌の千仏洞莫高窟というものは、御案内の通り今迄、壁画塑像を中心見られて参りました。中国仏教の一つの宝庫とされておるわけです。敦煌という片肅省の西北端の町に、その様な沢山の石窟寺院（ケイヴ・テンプル）が残されていまして、それに多くの絵画や塑像という造形資料が保存されている、同時に御案内の通りに莫高窟の第一七号窟から一八九九年に約四万点の写本が発見されたわけで御座います。これは、造形資料に対して文献資料といえます。特に中国に於きましたは、御存じの通り刊本資料は豊富で御座いますが、手書きの資料、マニュスクリプトは、極めて少ない。それが一七号窟から、一九世紀末より二〇世紀の初めにかけまして大量に発見されました。それは中国仏教史のみならず、文化史全般に關して非常に大きなショキングな出来事であつたと思います。私も、敦煌の文献を読むことを日常の仕事に致しておる訳で御座います。

その内に、一つ関心をもちましたことは、壁画という造形資料と、発見された写本という文献資料、この二つがどの様に交錯し、どの様な係り合いを持っているかということになります。従来、意外にその点に対するアプローチが、不足しているという印象を私は持つてゐるわけです。これは、恐らく

く学問が分化致しまして、造形資料の方は、美術史・史学の方の領域で、文献の方は、或いは仏教学の分野、或いは中国哲学・中国文学等々のフィールドという様に非常に細分化されてしまつた結果、その間の交流というのが、極めて少なくなつてしまい、それで美術は美術、文献は文献といふうに、独自に、その限り於いては、非常な発達を示したわけでは御座います。現在の段階に於きましては、敦煌を研究致しますのに、もう既にその段階を乗り越えなければならぬのでないかと思います。そこに残された文献資料と造形資料のその間の相関関係というものを、もう少し全体的に握まえていく必要が、有りはしないか。こう考えておる訳で御座います。実は、今日の御話もそれとほとんど切り離せない問題なのです。幸いなことに、私どもが、学生の頃敦煌の物を読み始めた頃と違いまして、現在では、敦煌の文献も殆ど全世界にある文献が、マイクロフィルム、フォトコピーによりまして、目に触れることが出来る様になつてまいりました。絵画の方も、大変立派な写真集、図版集が、次々と刊行されております。それから、現在では現地に行って直接その壁画塑像を拝見するといふことも、極めて容易に成つてきている、そういう意味では、今迄の敦煌の仏教の研究というものは、非常に細かい或る一分野、例えば法華經なら法華經の異本を集めそれを校勘の資料とする、テキストクリティックの資

料とする、という役割を担つていたのに対し、そうでは無くて、他の資料との関連、或は、絵画との関連、或は石窟寺院という寺の建て方の問題、つまり造窟形式の問題、そういうものと併せて捉えよう成つてきました。つまり、敦煌の資料というものは総てのフィールドに亘つて、全像^{ゼンザイ}を捉えうる様な段階に現在來ているのではないか、そういうふうに感じておる訳で御座います。これを全部取り扱いますことは、私の個人の能力では、到底不可能で御座います。又、時間の限りも御座います。先に、申し上げました様に、問題の拡散を防ぎます意味で、一応、地獄經典若しくは、その地獄經典の民間へ浸透していく過程として残された材料、それを少しばかり検討致してみたいと、こう思う訳で御座います。

御手元のコピーに従いまして、御話を進めさせて頂くことに致します。コピーのNo.1からNo.4迄、特にNo.1の§1として下げるものは、敦煌資料の中に残つておりまして、少なくとも、大なり少なり地獄の様相について触れているもので御座います。

凡例

北=北京図書館本。漢字No.=同上。S.=Stein No. P.=Pelliot No.
劫=『敦煌劫余錄』(陳垣・国立中央研究院歴史語言研究所專刊之

麥『敦煌麥文集』（上・下。王重民等。人民出版社版。一九五七。台灣世界書局版。一九六一）

校『敦煌曲校錄』（任二北・上海文芸出版社版。一九五五。世界書局版『全唐五代詩』下に収）

北目『王重民『敦煌遺書總目索引』（商務印書館。一九六一）

古『大正新修大藏經古逸部』（㊀卷八五）

§1 北本

1 ① 仏說大方廣十輪經（附北涼錄）

鳥58

（序品）辰66（發問本業斷結品）首次

宇73（利利依止輪相品）有欠、尾に朱筆にて「勘視」と記す

宿22

（遠離譏嫌品九、忍辱品十一）

為78

（同右）首次。人54（智相品）始38（同上）

奈23

（禪相品一四・智相品一五）首次

2 仏說觀仏三昧海經（東晉・仏陀跋陀羅訳）

例47

（觀四威儀品六）首次

淡21

（本行品八・觀像品九）首次

閻55

（同右）尾欠

3 仏說罪業應報教化地獄經（後漢・安世高訳）

重69

・首次

4 仏說孟蘭盆經（西晉・竺法護訳）

字75

5 樓炭經略

潛2（木軸アリ）

6 長阿含經（東晉・仏陀耶含・竺法念訳）宿35（首尾欠）

7 正法念處經（元魏・般若流支訳）

荒57

（生死品三）月14（地獄品三）珍58（地獄品六）荒57

（觀天品四）月14（觀天品四）荒57（觀天品二〇〇）黃49

（觀天品二一）月14（觀天品23）李27（身念處品六）

8 仏說犯戒罪報輕重經（劉宋・求郡跋摩訳）宇8 裳27

9 仏說救拔焰口餓鬼陀羅尼經（唐・不空訳）服85（首次）

10 净土三昧經

結65（有欠）長2

cf. 1（法苑珠林 鳥16△尾欠、有朱点）

cf. 2（經律異相＝敦煌本無△問地獄經・淨土三昧經・長阿含經・衆生三世治惡經・樓炭經・觀仏三昧海經・大智度論）

cf. 3（法苑珠林＝三世阿毘曇論・婆沙論・新婆沙論・施設論・長阿含經・樓炭經・觀仏三昧海經・起世經・大益淨土經・三法度論經・俱舍論・那先比丘問仏經・淨土三昧經）

1 長阿含經

四四〇八 相應品

2 大樓炭經

一〇四三（北目「仏經」とのみ記）一一〇五（北目「仏經」

とのみ記)

3

仏說觀仏三淨海經

三九八四（北目「報恩寺與牧羊人等會羊口字據」とのみ記）

六一一二（觀想品之四）卷四・四六七八（觀仏密行品）

六八二一（念七仏品之一〇）三二七四（觀仏密行品之六）

正法念處經

四七四三（十善業道品之二）〇三六五（觀天品之廿二）

〇四六五（觀天品之卅九）一九八八（身念處品—地獄品二

・残六行）三九九八（身念處品）五六六二（身念處品十善業惡口品）二九四三（畜生品之四）

「正法念處經摘抄」

○五一七

「正法念處經摘抄」

二九四三

7 仏說大方廣十輪經（附北涼錄）

三三六七（灌頂喻品第四）三三六八（同上第二〇）三一三

六（智相品）二二六二（同上）〇一〇九（同上）

cf. 1 法苑珠林

五六二四（雜抄三三卷校量部、三八卷故塔部）

P本

③ 長阿含經

二七六一紙背（遊行經第二、殘二〇行）

2 仏說觀仏三昧海經

二〇七八（觀仏密行品）一一〇〇〇（同上）一一三〇（同上
断片）二三〇〇（同上）

3 正法念處經

二一六七（地獄品）

4 法句經（吳・維祇難等訳）

三九二三（地獄品）

5 仏說盂蘭盆經

一一〇五五（紙背題記・弟子朝議郎檢校尚書工部員外郎・翟

奉達、為亡過妻馬子追福、每齋寫經。「大般涅槃摩耶夫人品
經」「仏說善息因果經」と連写。）

これらは地獄というものに就いて触れている経典、若しく
は、その断片であります。①北京図書館にありますテキスト
(北本・凡例参照)。②はS本、これは、イギリスのオウレル
・スタイン(Aurel Stein)が、持ち帰りまして現在、大英図
書館に収められておるテキストで御座います。③はP本、フ
ランスのポール・ペリオ(Paul Pelliot)が、持ち帰りまして
現在フランス国立図書館(ビブリオティク・ナショナル)に
保存されておるものをお指します。これらの中に、前に幾つか
挙げました様な経典が、御座います。その下に列記したのは、
それぞれに収められている写本の分類番号別の一覧で御座い
ます。何分にも敦煌から出た写本というものは必ずしも完全な
ロールとして残されているものばかりでは、御座いません。
フラグメントとなつて残つておるものも御座います。しか
し、入蔵経典、大蔵経と対比致しますと、現在残されている

のはその中の極少部分であつても、その經典自体が地獄のことに就いて触れたものであります。

例えば、プリントの一番目のセクション1の6に上げました長阿含經等は、北京本に残されております。しかし、宿35という北京の分類番号で見ます範囲では、地獄自体に就いての叙述は、御座いません。但し、御案内の通り、長阿含は、

入藏經典の方では非常に詳しく地獄の様相に就きまして、触れておりますので、恐らくこの長阿含經の敦煌本は、そいつたものの断片が、残されたものと思って、一応それだけは、挙げておいた訳で御座います。本来、存在していた地獄の描写に関する部分が、敦煌本の中においては、落ちています。しかし、元来は、存在したものとして考えておいた方が、良からうというので一応挙げてみた訳で御座います。この北京図書館本と、それからスタイン本とペリオ本、つまりプリントのNo.1からNo.2迄の間に挙げましたものを見てみますと、幾つかの特徴的なことが、御座います。第一には、次のような点が指摘できます。中国仏教の上で地獄の様相に就いてですね、これを集大成したと申しますか、集約したものと致しましては、經律異相が、最も大きなテキストとして挙げられる訳で御座います。これは、プリントの2番目の最初から五行目位、cf. 2. 所で挙げておきましたが、經律異相、特にその四十九巻、五十巻中に從來の諸經典の中からの地獄に関

する部分を摘出致しまして、集成、整理致しております。その後の中国人の記しました仏教的な地獄觀といふものは、これらは、經典其のものに溯って、それから出発したというよりも、經律異相のような一種の資料集から地獄に関する知識を吸収していた面が、あるようで御座います。

ところが、どうも敦煌本の地獄の文献を見てみると、必ずしも經律異相から出発しているとは、思われない。別の系統が考えられる訳で御座います。と申しますのは、北京本にもスタイン本にもペリオ本にも、三つに御座います正法念處經、プリントの1番目で申しますと、§1の7で御座います。

元魏の般若流支の訳と伝えられます正法念處經は、經律異相には、未収の經典で御座います。經律異相は、先きの所で書いておきましたが、可成り広く、從来の經典の中から地獄に関する部分を集大成致しております。勿論、經律異相は、地獄のことだけでなく、一種のエンサイクロペディアでありますから、他の多くのものも集成しておる訳ですが、特に、四十九巻、五十巻には、地獄の資料を網羅的に集めておりまます。ところが、經律異相そのものの写本は、実は、敦煌本にはない訳で御座います。或は、まだ未発表・未整理の敦煌資料も御座いますので、その中には、あるかもしれないが、少なくとも、現在の範囲内に於いては、まだ經律異相の敦煌異本というものは、公開されておりません。

或は、大英図書館、パリの国立図書館、北京図書館の他に大量に敦煌文獻を所蔵致しておるものといたしまして、レニングラードにあります東方研究所（東方諸民族研究所）といふのが、御座いますが、そこにも、沢山の仏經の断片類、あるいは完全なロールも残つております。これが、まだ全く未公開といつても宜しい状態です。このレニングラード本の若干の目録は、出ましたけれども、まだ完全ではありません。況して写真その他はまだ組織的には、日本にもたらされていません。私もレニングラードに参りました時、色々調べさせて頂きましたけれども、失張り大変に限られた見せ方しかさせて貰れませんので、まだ全面的にそれを調査した訳で御座いません。そのためこのレニングラードの仏教文獻について、詳しいことは申し上げられません。ただ少なくとも、今公開された範囲では、梁の時代の成立とされている經律異相は、敦煌本にはそのテキストが皆無であると言わざるをえない訳で御座います。

ところが、敦煌本には、現存の經律異相には入っていない正法念處經が、可成りの分量で残されている訳で御座います。§1の、つまりプリントの一番目の第7番目に御座います様に、北京本だけでもそれだけの正法念處經、特にその生死品とか地獄品が、完全な形で残されておる。それから、スタイン本にはプリントの二番目の第4番目に挙げました様に、

正法念處經其のものも残つておりますし、更に又、②の4の所には、敦煌本正法念處經のスタイン本が挙げてあります。ところが、5、6を見てみると5、6に正法念處經摘抄、それから正法念處經雜抄という一種の經典からのピックアップ、メモ、ノート類が残されている訳で御座います。これは正法念處經が講義されており、それを聞いていた学僧達が、それを摘記し、或はメモしたものとも考えられる節が多い。そういうしたもののが、スタンイン本の中に残つておるという点から申しますと、この經典自体がかなり流行し、一般の人には浸透していた。少なくとも学僧達の間ではこれに関する知識を求めるものが多かった、ということを考えられます。これは、ペリオ本に就きましても同様で御座います。

こう見てまいりますと、經律異相という地獄の知識を得る一種の非常に簡便と言えるエンサイクロペディアとは別系統のものとして、敦煌の地獄像、或は地獄知識、地獄觀というものが育つていったとも考えられる訳で御座います。ですから、その後の中国の、例えば道教側の資料に致しましても、或は道仏混合致しました場合にも、彼等の地獄像というものの中には、經律異相というものが可成り大きく響いている。ところが、どうも敦煌に於ける地獄の受け止め方というのには、そういう中原に於ける經律異相系とは、別のルートか

れます。御存じの通り經律異相は、江南、楊子江南岸で集大成されたもので御座います、それに対しまして正法念處經は、華北、北中國に於ける成立で御座います。地域的にいつても可成りの隔りがある。従つて敦煌に於ける地獄像、これは又、こういったエンサイクロペディアの系列とは別の角度から考えてみていく必要があるのでないか、というふうに思われます。細かい資料の説明を一々しておりますと時間が足りませんので少し先に進みまして、プリントの3番に入らさせて頂きます。

④ 十王經・閻羅王經関係

1 仏說十王經

S.三九六一（有図 cf. 仁井田陞「敦煌発現十王經図卷所見の刑法資料」△東洋学報二五一

一△）

P.二八七〇（有図（題記・成都府大聖慈寺沙門藏川述）

2 仏說閻羅王授記勘修七齋功德經

鹹75（尾題記・比丘道眞受持）服37（断片）宇66（断片）
字45（尾題記・安國寺弟子妙福、發心供養、敬寫此經十七

卷、一心供養）列26（尾題記・戊辰年八月一日、八十五老人手寫流伝、依教不修、生入地獄）岡44（文中記・為亡母

資冥福而書一閻羅王授記經、四月五日云々）

S.四八九〇（作「……勘修生七齋……」）

3 仏說閻羅王授記送修七齋往生淨土經（一作「仏說閻羅王授記、

令四衆……」）

S.二四八九（題記・安國寺患尼弟子妙福、發心敬寫此經、敬心供養）S.三一四七（題記・界比丘道真受持）S.五五四四（題記・奉爲老耕牛一頭、敬寫金剛一卷、授記一卷、願此牛身領受受功德、往生淨土、再莫受畜生身、六曹地府、分明分付、莫令更有讐訟、辛未年正月）

4 仏說閻羅王授記四衆豫修生七往生淨土經

P.二〇〇三（拋尾題。有図。又題「仏說十王經一卷。題記：成都府大聖慈寺沙門藏川述。」与P.二八七〇同。）

5 仏說閻羅王授記經

S.二八一五。S.四五三〇（題記・戊辰年二月二十四日八十五……）S.五四五〇紙背（紙表「金剛經」題記・西川過家眞印本）S.五五三一紙背。S.五五八五。S.六二三〇（題記：奉爲慈母病患速得痊差、免受地獄、一爲在生父母、二爲自身、及合家内外親姻等、元知□長、病患不侵、常保安樂、寫此經、免其□業報。」紀年・「同光肆年（九二六）修戌歲六月六日、寫記之耳）P.三七六一（又題「閻羅王豫丙生七往生淨土經」題記・「成都府大聖慈寺沙門藏川述。」与P.二八七〇 P.二〇〇三同）

⑤ 地藏經関係

1 地藏菩薩本願經（唐・実叉難陀訳）

重31（地獄名号品五、校量布施功德因緣品十、分身集会品二）（紙背有疏文）S.〇四三一（卷下）S.五八九一（「地藏菩薩經」と題す）

2 仏說地藏菩薩經

金62（首尾俱完）帝81（首尾俱完）S.二二四七。S.五五三
一V.（「解百生怨家陀羅尼」「天地請問經」「延壽命經」「閻
羅王經」等と接写）S.五五三五。S.五六一八V。S.五六七
一。S.五六七七。S.六二五七。P.二二八九（「延壽命經」等
と接写）P.二八七三（冊子、有書皮）P.三七四八（「心經」
と接写）P.三七六〇（「觀音經」「統命經」と接写）P.三九
三二（「觀音經」「心經」「統命經」「解怨家百生經」等と接
写）

帽地藏菩薩図（絹本著色、ギメ博物館、経文有り、大平興
國六年一九八一）（松本栄一「敦煌画の研究」附図一〇
一〜一四。図像篇III 16〜7）「西域美術1」（講談社、
一九八二、スタインコレクション）45、46。

3 地藏菩薩十齋日
S.二五六八。S.四四四三V.

4 地藏菩薩陀羅尼

S.四五四三（「千手千眼広大円満無礙大悲大陀羅尼」「馬頭
羅刹観世音陀羅尼」「枳迦牟尼仏心地咒」等と接写）

cf 1. P.四〇七〇（地藏菩薩図・被帽彩色）

cf 2. 引路菩薩図（絹本著色、大英図書館）同上（同上）同上（同
上）。地藏十王図下段（絹本著色ギメ博物館。経文あり。

太平興國八年一九八三一）引路菩薩図（絹本著色、ギメ博物館）被帽地藏菩薩図（絹本著色、大英図書館）同上（同上。下段経文有り）同上（同上。経文無）被帽地藏菩薩図
(絹本著色、ギメ博物館)。地藏十王図（絹本著色、ギメ博物館）被帽地藏菩薩十王図（絹本著色、デリー博物館）被
幅地藏菩薩十王図（絹本著色、大英図書館）同上（同上、
大英図書館）同右（同上）同上（同上、ギメ博物館）同上
(同上) 同上（同上）△※建龍四年一九六三一△十王経図
巻中被帽地藏菩薩図（京都山本氏蔵）千手觀音図下段被

実は、プリントの3番目と4番目に上げました十王経閻羅
王経関係とそれから5番目に上げました地藏経関係、これだけは特に別のものとして資料をピックアップしておきました。
た。何故かと申しますと、これ等は私が提起いたしました造形資料・美術資料・絵画資料というもののとの関連が極めて濃厚に表れております。この十王経関係と地藏経関係、この二つに於いてはそのことが非常に端的に出ております。写本の数も一経典の異本と致しましては、圧倒的に他の地獄のこと
を書いた経典を、凌いでおります。十王経と閻羅王経は、言わば裏表の関係にある経典で御座いますから、一緒に扱かわせて頂きました。ここに挙げました仏説十王経、或は仏説閻羅王授記勘修七齋功德経等、若干具名は違いますが、内容は極めて近いもの、或は殆ど一致するものです。この十王経関係のものを見て指摘しておきたいことは以下のとおりです。まず第一は、今申しました図像絵画との関係が非常に深いということです。敦煌の所出経典の中で、絵画を伴つてゐる文献(壁画では御座いません)、一巻の中に、或は数巻に渡りまして図を伴つている経典というのは、そら多い訳では御

座いません。十王經閻羅王經関係の經典には、それが極めて端的に表われている。そのプリントの3の十王經閻羅王經関係の所に挙げました資料には、カッコをして有挿図、彩図とか一寸摘記しておきましたが、こういうふうに絵画とパラレルな形で書かれているものが非常に多い。単にこれのみによって全てを律することは出来ないかもしませんが、少なくとも經典による地獄觀の普及と共に図記による地獄像の把握という方法が、十王經閻羅王經関係經典に於いて特に顯著に表われている現象ではないかと思われます。勿論、これは実は、先程冒頭で本日は触れないということで申し上げました道藏関係（道教の藏經）との関連に就いて当然見ていかなければならぬ訳で御座います。一応ここでは、仏典に限つて申し上げます。御覽になつて御分かり頂けます様に、写本そのものの中に地獄絵が書れているものが可成りある、これが一つ。それと関係致しましてプリントNo.3 cf. 1 に於けて於きました様に十王經の図巻（これは經典を寧ろ従とし、絵を寧ろ主とする絵巻きで御座います。）これが、可成りまとまつた形で残されておる。

cf. 1

- ① 十王經經図巻断片（「仏說閻羅王授記四衆（以下欠）」十三行
　　残の断片経文有り）淡彩。大英図書館
- ② 十王經図巻（著色、大英図書館）

- ③ 十王經図巻（著色、大英図書館）
④ 十王經図巻（淡彩、京都山本商会、経文、讀有り）
⑤ 地藏十王図（絹本著色、ギメ博物館、経文有り。太平興國八年一九八三一の紀年）

松本栄一「敦煌画の研究」附図一一四、一一五、一一六、一七、一一八、一〇四。図像篇III—6。

禿氏祐祥、小川貫式「十王生七經讚図巻の構造」（「西域文化研究」五。PP二五五～二九六）

そこに挙げました様に十王經図巻とか、或は地獄十王図とか、こういったものは經典を伴つていてそれにコメントを付けておるものも御座いますけれども、寧ろ絵を中心とした資料と見るべきです。勿論、敦煌の資料というものは残された文献だけが全てという訳で御座いませんで、可成り逸しておるものも御座います。残された經典だけで物を言うのは、少し危険だということもありますけれど、これだけ集中的に絵画と結び付いている地獄像、地獄經典というものは、まず他の經典に於いては見られない。例えば、先程申し上げました正法念處經等に致しましても、これは図像を伴つたもの、絵画を伴つたものという資料は一つも御座いません。元来、これは或は私の個人的な偏見かもしませんけれど、地獄像、地獄のアスペクト、その恐怖なりそれからの抜苦救済ということは当然ながら、衆生の直感に訴え、感覺に訴えて、初めて強く意識されるものと思います。地獄像といふものは、絵画を伴う

ことが寧ろオーソドックスなやり方ではなかつたのか。經典すなわち文献の文言を以つて地獄の諸相を見るというよりも、寧ろ視覚に直接訴える地獄の諸相の方が効果的であります。八大地獄等の恐しさと、さらには墮地獄から逃れようとする意識、或は自らの肉親が墮地獄した場合にそこからの抜苦救済を願う信心等は当然のことながら、非常に具象的であり、情緒的であり、感覚的である必要があります。その意味では、絵画というものは地獄のことを説く場合に言つてみれば不可欠の要素ではないかとも考えられます。十王經閻羅王經関係では絵との関係が深く保たれていたということは寺院の中に於ける学僧や、或は知識層は別と致しまして、少なくとも民衆に対する地獄像地獄觀の普及には、可成りこれが決定的な役割を果たしていたのではないかと思われます。これが十王經閻羅王經関係の敦煌に残された文献類を点検した場合に導き出される第一の考え方と思ひます。

第二には、皆様、プリントの3番目の所に上げました十王經閻羅王經関係のものを御覧になつて見ると直に御分かりのことと思ひます。特に、經典の下に摘要致しました、經典の後に付いておるいわゆる題記についてであります。奥書き、題記という場合も御座いますし、識語という場合も御座います。これが、非常に多く残されているのは、矢張り十王經閻羅王經関係の特色と見て寒しいかと存じます。而も、それが

全部が自分や、肉親の墮地獄を恐れ、そこからの解脱を願う、そういういわゆる先亡得脱の為の題記、識語です。殆ど全部が地獄から自らの肉親を救い、自らも又、地獄に墮ちないということを願つて書かれたものばかりであります。例えば、1の例だけを挙げて於きますと、④の2の仏説閻羅王授記勸修七齋功德經ですが、これを見てみると、例えばその中で四行目に書いて於きました岡44、これは北京にあります写本です。その中に「為_ニ亡母資_ニ冥福、而書_ニ一閻羅王授記經、四月五日云々」の識語が残されておる。それから3番の仏説閻羅王授記送修七齋往生淨土經、これにも似た様なもののが大変多い訳で御座いまして、二行目の下の方のSの五五四を見てみると、「奉為_ニ老耕牧一頭、敬寫_ニ金剛一卷・授記一卷、願此牧身領_ニ受功德、往_ニ生淨土、再莫_レ受_ニ畜生身」とあります。

No.3の④の5を見てみます(S.六一一〇)と、その識語に

「奉為_ニ慈母病患、速得_ニ痊差、免_レ受_ニ地獄、一為_ニ在生父母、二為_ニ自身、及合家内外親姻等、元知_ニ長、病患不_レ侵、常保_ニ安樂、寫_ニ此經、免_ニ其_ニ業報。」こういった類いの先亡得脱、墮地獄を避ける為の識語が、極めて詳細に記録されておりまます。これは敦煌の十王經関係に於いて非常に目立つ現象で御座います。敦煌本の十王經閻羅王經関係を通観してみました場合の第二の特色で御座います。

第三番目にこれ等を見てみると、これは実はここに直接問題に致しますと非常に問題が広がりますので、問題の指摘だけに留めておきますが、プリントの3番目の④の1、仏説十王經の二行目に書いておきましたペリオの二八七〇の写本の題記には成都府大聖慈寺沙門藏川の述べしもの、という題記が残されています。尚、これと同じものが他にもある訳で御座いまして、4番目の仏説闍羅王授記四衆豫修生七往生淨土經という題記にも、成都府大聖慈寺沙門藏川の述べたもの、というのが、残っております。また5番目の一一番最後に挙げましたペリオの三七六一にも全く同じ識語が残つております。これは同じテクストの異写本とみて宜しいと思ひます。この成都つまり蜀との関係を示す記述のことが十王經関係については非常に特徴的で御座います。実は、敦煌と蜀と申しますと、一方は西北、一方は中国の西南で御座いますから、距離が誠に遠いようですがれど、地獄經典に限らず残された写本の中に蜀に於いて成立したものを敦煌に於いて写したもののがいくつかある。そういう蜀成立敦煌写本といふ文献が可成り残されている訳で御座います。この蜀と敦煌の関係ルートはいかんということは、今後の大きな問題として残されていると思います。敦煌文化を単に西北端の辺地の問題、或は中央アジアの一地域の問題としてではなく、寧ろ中国仏教全体、中国文化の全体中で捉える、この一つの手掛

りになるものではないか、というふうに考えておる訳で御座います。これに就きましては、フランスに陳祚龍さんという中国人でフランス国籍の学者の方が研究しておられます。陳祚龍先生は、蜀という西南地域と敦煌という西北地域この間の文化交流というものに就いて、これは仏教を中心としたものでは御座いませんけど、アプローチしようという意欲を示されております。この成果等は、断片的には御座いますけれど香港から出ております敦煌学という雑誌（これは香港の新亞大學から出ている学報で御座います。現在のところ敦煌学専門の離誌というのは、香港で出ている敦煌学と去年（一九八一）から中国で、敦煌学輯刊という雑誌が蘭州大学から出ているものと二つ御座います。）その中の第一の香港の敦煌学の第一号に陣祚龍氏は、この問題に就いて若干触れておられます（陣祚龍：中世敦煌与成都之間的交通路線——敦煌学第一輯七九一八六頁）但し仏教に就いては殆ど触れておられません。蜀仏教と敦煌仏教との関連、或は中国仏教全体の中の位置づけ、というものに就いては、陳さんは余り触れられておられない。しかし、これは中国仏教史の研究にとって今後更に開拓を要する分野ではなかろうか、況して蜀は御案内の通り、道教のメッカで御座います。従つて、道教のメッカであつた蜀というものと敦煌というものの仏教史上の関連を知るといふことは、ある意味では道教と仏教、仙と仏の習合過程とい

う中国仏教史では欠かせない課題にアプローチする一つの依り所となるのではないか、というふうに思われます。その意味でこの十王經といいますのは、先程申しました一つには絵画との関連、もう一つはそれに対する先亡得脱を願う民衆の識語が、極めて強く表われていること、そして更にそれが中国の全土とは申しませんけれども、少なくとも残された範囲で言えば、蜀仏教、或は蜀道教というものと関連しても、もう少しグローバルな捉え方を必要としてる、と存ずる訳で御座います。この十王經と非常に関連の深い經典が、プリントの4番目に差し上げました地蔵經関係で御座います。

1111 「觀音經」「心經」「統命經」「解怨家百生經」等と接写^①)

3 地蔵菩薩十齋日

S.11五六八。S.四五四三V.

4 地蔵菩薩陀羅尼

S.四五四三 「千手千眼広大円滿無礙大悲心大陀羅尼」「馬頭羅刹觀世音陀羅尼」「枳迦牟尼仏心地咒」等と接写)

cf. 1 P.四〇七〇 (地蔵菩薩図、被帽彩色)

cf. 2 引路明薩図 (絹本著色、大英図書館) 同上(同上) 同上(同上)。地蔵十王図下段 (絹本著色ギメ博物館。経文あり)。

太平興國八年一九八三一) 引路菩薩図 (絹本著色、ギメ博物館) 被帽地蔵菩薩図 (絹本著色、大英図書館) 同上 (同上)。下段経文有り) 同上 (同上)。経文無) 被帽地蔵菩薩図 (絹本著色、ギメ博物館)。地蔵十王図 (絹本著色、ギメ博物館) 被帽地蔵菩薩十王図 (絹本著色、デリー博物館) 被帽地蔵菩薩十王図 (絹本著色、大英図書館) 同右 (同右、大英図書館) 同右 (同右) 同上 (同上。ギメ博物館) 同上 (同上) 同上 (同上) △※建龍四年一九六三一>十王經図 卷中被帽地蔵菩薩図 (京都山本氏影片) 千手觀音図下段被帽地蔵菩薩図 (絹本著色、ギメ博物館、経文有り、大平興國六年一九八一) (松本栄一「敦煌画の研究」附図一〇一~一一四。図像篇III-6~7) 「西域美術1」(講談社、一九八二、スタインコレクション) 45, 46。

言つてみればこれは十王經と密教不可分の関係に御座いまして、經典の中でも冥府の十五、十人の王様、そこから解脱と接写) P.三七六〇 (「觀音經」「統命經」と接写) P.三九

5 地蔵經関係

1 地蔵菩薩本願經 (唐・実叉難陀訳)

重31 (地獄名号品五、校量布施功德因縁品十、分身集会品
11) (紙背有疏文) S.〇四五三一 (巻下) S.五八九一 (「地蔵菩薩經」と題す)

2 仏說地蔵菩薩經

金62 (首尾俱完) 帝81 (首尾俱完) S.二二四七。S.五五三

一V. (「解百生怨家陀羅尼」「天地請問經」「延壽命經」「閻羅王經」等と接写) S.五五三五。S.五六一八V。S.五六七
一。S.五六七七。S.六二五七。P.一一八九 (「延壽命經」等
と接写) P.二八七三 (冊子、有書皮) P.三七四八 (「心經」
と接写) P.三七六〇 (「觀音經」「統命經」と接写) P.三九

救濟させる引路菩薩の經典として書かれております。地獄を説いた閻羅王經十王經とそれから抜苦救濟のシンボルとしての地藏菩薩というものは、これは切り離せない関係に御座います。しかもこれも矢張り、図像や絵画との関連が深い。例えばそのプリントの4番目のcfの1、ペリオの四〇七〇というマニュスクリプトは、完全な図巻、絵巻きで御座います、cfの2に上げましたのは、大英図書館や、或はパリのギメ博物館や、或はインドのデリー博物館等に残されました図像で御座います。この中には、御地藏様の絵だけ画いてあって地獄の絵が残っていないものも御座います。しかし少なくともこれは、壁画では御座いません、絹本や紙に書いたもので御座います。敦煌の菩薩画としては地藏菩薩像は、觀音像と並んで双璧で御座います。残された資料が、最も多いということに關しましては、地藏菩薩像と觀音菩薩像というこの二つが他を圧している。矢張り地藏菩薩像というのは、極めて具象的、情緒的、感覺的に人々に訴えかけていくものであるといえましょう。時間の關係が、御座いますので、細かい一つ一つの資料に就いては、申しませんが、唯一申し上げておきたいことがあります。地藏經關係に就いて申しますと、これは資料に書き留めました、夫れ夫れの巻物の後に残された題記と、対比して御覧になると御分かりになると思います。写本として非常に多く觀音經と接写したものがある。また延

寿命經等と接写したものがあるということです。つまりこれらの經典と並んで写されているのが地藏經關係には、多いといえます。或は真言陀羅尼とは限りませんで、所謂マントラ類と並べて同じ巻物の中に書かれている。非常に短かくて、然も非常に一般に普及していた經典と、地藏經とは接写されていることが多い。敦煌の巻物類で、同じ巻物の上に幾つもの經典が並べて書かれてある場合、それを接写本と申します。それが非常に多い、これも一つの特色であるといえます。これは何を意味するかと申しますと、觀音經であるとか心經であるとか、延寿經であるとか、そういったものと合せてメモし、合せてそれを日常誦していました。言わばそういう信仰生活の反映として理解することが出来るのではないかと存じます。従いましてこれも先程申しました十王經との関連で申しますと、極めて直接的具象的に民衆の生活の中に融け込んでいる。このように理解される訳で御座います。一口で申しますと、それは極めて現世利益的な様相を濃厚に帶びています。そしてその現世利益を、非常に具体的に情緒的に訴えかけていたものではないかと思われます。そう言つたことで、唯今迄申し上げましたことを一應要約してみますと、敦煌の地獄經典というものは、必ずしも後の人々の多く利用するよう、經律異相のようなエンサイクロペディアから直接影響を受けたものののみではなく、独自の利用の仕方、独自の発展の

仕方というものを持っていたのではないか、ということが一つ。それから十王経地蔵經等の関係について言えば、これが極めて民衆的というか（民衆的というのは極めて漠然として言葉で御座いますから誤解を生じるといけませんけれども）

非常に即物的直観的な現世利益的なものとして、絵画を伴い立体的に普及していった。これは地獄の恐怖を説くのに言わば最も効果的な、最も自然な姿であったのではないか、といふうに感ずる訳で御座います。これが二つ目。更に經典を離れての資料について述べますと、そのNo. 4の§2に上げておきました經典の言わばバラフレイズといったテキストが御座います。変文類がそれです。

§2 変文類

① 大目乾連冥間救母変文并図一巻并序 S.二六一四（尾題記：貞明染年辛巳歳四月十六日、淨土寺学部薛安俊寫。張保達文書）

大目乾連冥間救母変文 P.二三一九、P.三四八五、P.三一〇七P、四九八八、盈⁷⁶麗⁸⁵、霜⁸⁹、S.三七〇四

※「大平與國二年、歲在丁丑潤六月五日、顯德寺學仕郎楊願一人思微、發願作福、寫尽此目連變一卷。後同祝迦牟尼佛一會弥勒生作佛為定、寫尽目連變者、同池へ持▽願力、莫墮三塗。」の題記。

② 「目連變文」成96（首尾欠）以上（変）巻六、七一四~七六〇頁。

③ 目連縁起 P.一一九三（尾題記・界道眞本記）以上（変）巻六七〇一~七一一頁。

④ 地獄變文 衣33（§2及び別紙No.5参照）S.五四三（同上）
(変)巻六、七六一~七六三頁。

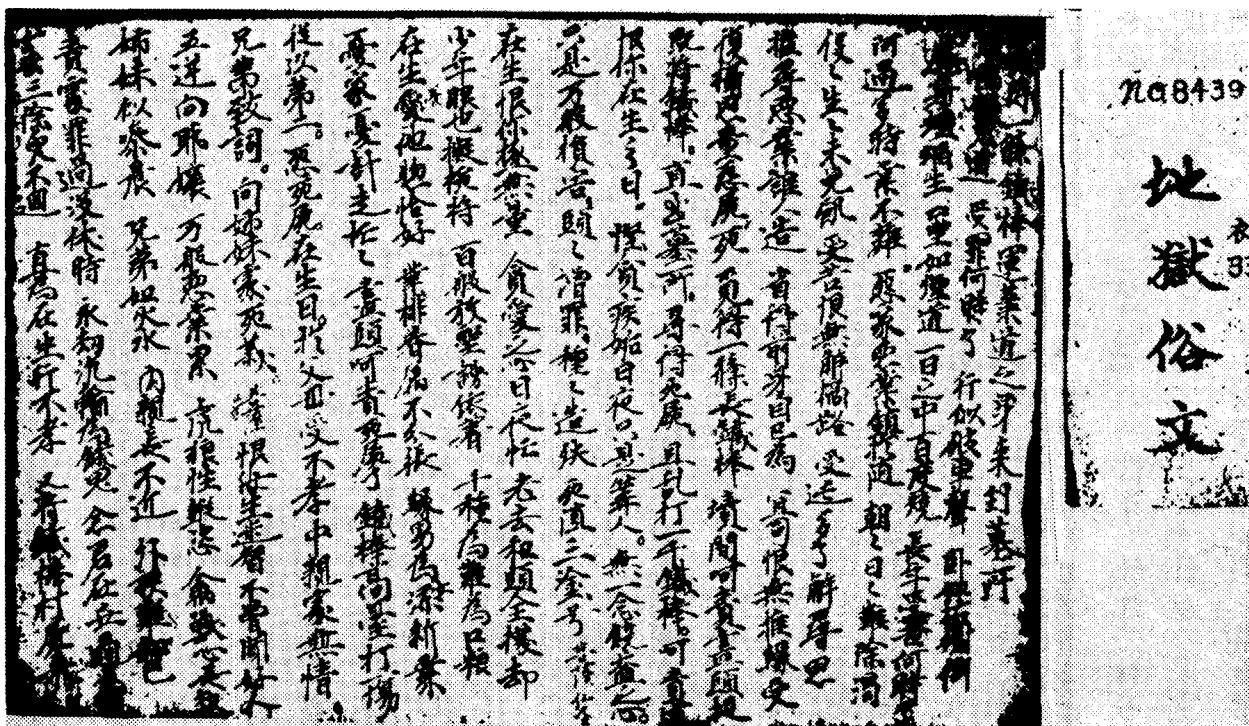
変文と申しますのはヘンモンと読む方も御座いますが、これはもう皆さん御存じの通り仏典の教理なり、或は物語なりを、或は更に発展して經典以外の中國個有の説話や物語等も含みまして、そういうものを言わばバラフレイズして一般の人々に説いて聞かせる。そういうもので御座います。この変文というものが、絵画を伴っていたということは、これは現在ではほぼ明らかにされております。いま、これを証明しておりますと時間が掛ります。もう既に多くの方が変文はイラストを伴った布教用の台本であるということに就いては御存じで、学会の定説も一致しておる訳で御座います。一々それを申し上げることは、致しません。一例だけ申しますと§2の①の中に上げておきました大目乾連冥間救母變文并図一巻并序というロンドンにあります資料で、「并びに図」という句がタイトルにあるのを見ても分ります。この巻は、元來が絵を伴っていたものである。これは、他の証拠を上げることも出来ます。その変文で地獄に就いての一番多く触れておるのは、仏說盂蘭盆經から直接材を採っております目連の変文というもので御座います。目連のことを書いた經典と言えば、御案

内の通り前にも挙げておきましたが、孟蘭盆經があります。

これは、通常中国撰述の偽經とされています。最近では、必ずしもそなへばかりでも御座いませんで、先程上げました岩本裕先生の様に孟蘭盆經そのものの祖形は、これはどちらかというとイラニック、イラン系の方から來た宗教思想というものが、可成り大きく働いているんだという、非常にユニークな見解も御座います。（岩本裕）

又、それに対する当否は、まだ学会で定っているとは申し上げられません。少なくとも中国に入りましてからは、非常に普及し、デフォルメされていった經典であることは、確かに御座います。この目連變文も図を伴い、恐らく七月十五日というお盆の日に多く奉ぜられ、誦せられたと見られます。また地獄變文と名が付きますものは、これは実は現在のことろ二つ程残されております。これに就きましては、實物はプリントの5番目の④に上げました。

地獄變文といふものは、これは現在、私共が、目にすることの出来ます地獄に関する、地獄を主舞台とした民衆用、布教用の台本で御座います。實物は、片つ方は北京に御座いまして、片つ方はロンドンに御座いまして、その写真は、プリントの最後の二枚は、最初に上げました。地獄俗文と申しますのが、これが北京にあります地獄の變文。これに就きましては一番最後に触れることに致します。プリントの一番最



後に上げましたのがロンドンにあります文献中で地獄について書いたもの。

これを通常地獄変文（これは後の人間が付けた題で御座います）といつております。その他、変文類の中で、部分的に地獄に触れたものは、沢山御座います。例えば、そこに上げました④の歸西方讚という浄土関係の讚文で御座います。その中に歸去来という名前で呼ばれている一種の俗曲、民歌が御座います。それからbに上げました禪門十二時という資料もあります。十二時というのは、一篇を十二支に分けてその一つ一つに韻文を付けていくという、そういう体裁のものです。それ等の中には地獄について述べた部分も御座います。

cf. 1

a 歸西方讚 P.二二五〇、二九六三。文85、(古) 校一〇五

歸去來

三塗地獄実堪憐、千生万死無休息、多劫常為猛焰
燃、聲聲為念弥陀號、一時聞者坐金蓮((大)47作
「金台」)

歸去來 刀山劍樹實難當、飲酒食肉貪財色、長劫將負入鑊
湯、不如西方快樂處、永超生死離無常。

b 禪門十二時 鳥10

黃昏戌 夷路幽深暗如漆、牛頭王乖把鐵叉、罪人一入無時

主、至者声者心膽寒、幸者思量莫輸失、當來欲得
避險路、勸修鉢(般)若波羅蜜。

人定亥 罪福總是天曹配、善因惡業總相隨、臨渴掘井終難悔、榮華總是風中足（燭）眼里（裏）貧素（索）

大癡晦、一朝臨令（冷）臥黃泉、百年富貴之何在
欺詐、犯人婦女、不孝父母兄弟、惜財不肯布施。今死令

我隨惡道中、勤苦毒痛不可復言、是故來鞭之耳出譬喻經

⑤ 「唐太宗入冥記」S.二六三〇。（麥）卷二、二〇九～二一五頁
例えば、歸西方讚を見てみると「歸去來、三塗地獄実堪」

憐、千生万死無_ニ休息、多劫常為_ニ猛焰燃、聲聲為念_ニ弥陀號、
一時聞者坐_ニ金蓮」といったふうなものも御座います、或は

禪門十二時の最初に御座います様に「冥路幽深暗如_レ漆、牛

頭王乖_ニ把鐵叉、罪人一入無_ニ時主、至者聞_レ声心膽寒、幸者思

量莫_ニ輸失、當來欲_レ得_レ避_ニ路險、勸_ニ修鉢若波羅蜜」という

類です。地獄に就いての若干の描写を伴うものは、これは沢

山御座います。しかし地獄そのものに就いて触れたものとい

うのは、余り沢山ある訳では御座いません。主として盂蘭盆

經関係のものと地獄變文と呼ばれるものです。実はこの地獄

變文と呼ばれているものに就いて御話しする十分な時間が御

座いませんので、一寸コメントだけ付けておくことにしま

す。プリントの6番目に上げておきました北京にあります地

獄變文。

衣33 「地獄變文」（北本「地獄俗文」と擬題す）

(変)卷六・七六三頁 校記「[] 原本無題、依内容擬補。

① 『經律異相』卷第四十六 ((大)53、一一二) P.四四四 a.

鬼還鞭其故屍 十五

昔外國有人死、魂還自鞭其屍。傍人問曰。是人已死何以

② 「敦煌變文集」下卷六

【地獄變文】

(前編)覓得一條鐵棒、運業道之身、來到墓所。

繞生餓鬼道、

受罪何時了。

行似破車聲、

臥如枯木倒。

遍身煙焰生、

口里如煙道。

一日之中百度燒、

長年受苦何時了，

阿過多時業不離、

怨家惡業鎮相隨，

朝朝日日難除渴、

假假生生未免飢。

受苦恨無解摘路、

受過多了解尋思，

推尋惡業誰人造、

省得前身自己爲。

宜司恨無推緣受、

復攝思量怨死屍，

覓得一條長鐵棒、

墳問呵責盡頭槌。

既將鐵棒、直至墓所、尋得死屍、且亂打一千鐵棒。呵責道、「恨你在生之日、慳貧疾姤(姤)、日夜只是算人、無一念饒益之心、只是萬般損害。頭頭增罪、種種造殃、死值三塗。」

號・菩薩佛子

在生恨你極無量、 貧愛之心日夜忙；
老去和頭全換却、 少年眼也擬椀將。

百般放聖謾依着、

抹消「愛」改「憂」細字記入

在生憂他總恰好、

排業按眷屬不分張。

緣男爲女添新業、

「女」細字記入

憂家憂計走忙忙；

盡頭呵責死屍了，

鐵棒高擡打一場。

從次第二。怨死屍在生日，於父母受不孝中親處無情；兄弟致詞，向姊妹處死義。菩薩佛子

恨汝生迷智，

不曾聞好人。

五逆向耶娘，

萬般惡業累。

虎狼性縱恣，

禽獸心長起。

姊妹似參晨，

兄弟如火水。

內親長不近，

外族難知己。

責處罪遇沒休時，

永劫沉輪爲餓鬼；

念君在世遇爲灾，

一去三途更不迴。
又將鐵棒打屍來；(下闋)

周紹良『譬喻經變文』(敦煌變文彙錄)

一〇三~一〇六頁。

cf.

一九五四·一九五五
向達『地獄變文』(國立北京圖書館館刊)六一一。一四~一
四頁)

許國霖『譬喻經變文』(敦煌石室寫經題與敦煌雜錄)雜三二
~三三頁)

これは元來地獄變文とも称し、或は地獄俗文とも呼ばれておりまして、地獄經典の何れかから採つたものであろう、といふに見られておりました。リプリントされた文章を挙げておきましたので御覽になつて御分りになると思いますけれど、実は非常に特殊な地獄の物語で御座います。死んだ人の亡者が、地獄に墮ちて何故自分が地獄に墮ちたのか、ということを考えてみると、これは他の誰を恨むこともなくて

自分が悪かつたんである。自分が前世において業を重ねたために死んで地獄に墮ちて苦しんでいる。それでその地獄に墮ちた亡者が、腹を立てまして誰を罰してやろうかと思つたら、罰するのは自分しかいない訳で、御墓の所へやつて来て、自分の死骸を引きずり出してきて、そしてそれを鉄の棒で打ん殴るという、そういう誠に奇妙な話をして御座います。これに就いては、沢田瑞穂先生も一寸普通の地獄の物語と異う、どうもこれは独特のものではないか、というふうに見ておられる訳で御座います。実は、これと類似の話しが見つかりました。これは、經律異相の卷の四十六に(大正藏53卷)御座います。その一番最後に、第十五として挙げております。鬼つまり幽靈がですね、その元の屍を鞭打つ話として譬喻經から採つたということでおでております。これが、ほぼ同じ御話を打ん殴つていた。側の人人が何故そんなことをするのかと聞くと、私は生きていた時悪い事をして、戒律をも守らず、經典を読まなかつた為に地獄に墮ちた。その地獄に墮ちたのを懲らしめようと思ったら、自分を懲らしめる以外にない。従つてこれは自分の死体を叩く以外ないというので、亡者が自分で自分の死骸を引きずり出して叩いたのだという、そういう御話で御座います。これは、通常の地獄經典と異なる様で御座います。現行の譬喻經は唐の義淨の訳で御座いますが、ところ

が、先程申しました様に經律異相は、梁の時代の成立で御座いますから、現行の譬喻經から採つたものではないということは、確かに御座います。そう致しますと、離譬喻經、或は別系統の譬喻經から採つたものとしか思えない。現行の雜譬喻經関係を見てみましても、これと類似の話は、まだ見い出し得ない様で御座います。従つて、又これは全く別のルートから入つて来た御話ではないか、というふうに感じております。地獄經典の中には、こういった独特の展開をしているものも御座います。その点だけは、一寸触れさせておいて頂きます。時間で御座いますので、最後に又、プリントの5番目に房りまして、先程申しました様に地獄の經典、十王經、それから目連の変文、或は盂蘭盆經関係、地藏經関係、これ等は非常に絵画との関係の深いものであるというのは、先程申し上げました通りで御座います。ところが、ここに一つ最も私が解し難く思つておりますのは、今迄申し上げました絵画は、或いは文献の上に記載された絵画、或は絹本に画かれた絵画で御座います。壁画では、御座いません。度々、私は、壁画ではないとくどくど申しましたのは、その為で御座います。敦煌には、現在壁画が沢山残つておるのは、御存じの通りです。千仏洞と申しましても、千ある訳で御座いません。現在我々が見られるのは、四九二の洞窟しかありません。ところが、その四九二の洞窟に残されました壁画を全部

点検致しましても、壁画として地獄變を描いたものは、一つもないということで御座います。敦煌の千仏洞には壁画として地獄の像を描いた、所謂地獄變は一つも残っていない。少くとも現在の壁画中には、残つていらない。ところが、文献の中には地獄に関するイラストを伴つた經卷、經典が極めて多量にある。こういう逆転した現象が、起つておる訳で御座います。逆に、長安の方はどうか。中原仏教の方はどうかと云ふと、同時代のものとしての中原の唐代仏教を見てみますと、

§3

① 唐張彦遠『歷代名画記』〔学津討原〕本、「津逮祕書」本

卷三、「記兩京・外州寺觀画壁」

慈恩寺……塔之東南中門外偏、張孝師画地獄變、已剝落。

寶刹寺……西廊陳靜眼画地獄變。

三階院……東壁張孝師画地獄變。

景公寺……中門之東、吳画地獄并題。

化度寺……盧稜伽画地獄變、今残兩頭少許耳。

淨法寺……殿後、張孝師画地獄變。（以上、上都）

福先寺……三階院、吳画地獄變。

敬愛寺……西壁西方佛會、十六觀及閻羅王變。（以上、東都）

② 唐段成式『酉陽雜俎』續集卷之五（脉望館本、「学津討原」本、「稗海本」、中華書局本）寺塔記上

常樂塔趙景公寺、隋開皇三年置、本日弘喜寺、十八年改焉。

南中三門裏東壁上、吳道玄白画地獄變、筆力勁怒、變狀陰
怪、睹之不覺毛戴、吾画中得意處。

- ③ 謝稚柳『敦煌芸術叢書』（上海出版公司、一九五五）△「地獄
變」壁画ナシ△『敦煌莫高窟石窟』平凡社、一九八一〇八
二。△「地獄變」なし△

そのプリントの5番目の§3に上げました唐の強彦遠の歴代
名画記の「記兩東・外州寺觀画壁」という序や、二番目に上
げました唐の段成式の酉陽雜俎の続集の寺塔記等に夫れ夫れ
長安の各寺院の地獄壁画の記録があります。例えば、慈恩寺
では強孝師という人が、地獄變を画いたとか、或は宝刹寺で
は陣靜眼という人が、地獄變を画いたとか、或は景公寺では吳と
いう人、吳道玄その人が地獄變を画いたというふうに、長安
寺院の記録には、地獄壁画があつたということがしるされて
います。寺塔記の中にも、酉陽雜俎の中にも吳道玄が地獄變
を白画したことがあります。白く画いたとあります
が、これは色をつけない縁取りだけを画いたということで御
座います。そういう記録が、残っております。このように敦
煌と対比してみると非常に矛盾した現象が、起っている訳で
御座います。簡単に申しますと長安の方には、壁画はある、
しかしそれを文献にした画卷、絵巻物、絵巻を伴つた文献資
料はない。ところが、敦煌の方を申してみますと、壁画とし
ての地獄變は一つもない、ところが絵巻としての地獄図は非

常に豊富にある。こういう丁度逆の現象が起つてゐる訳で御
座います。ここから幾つかの可能性がひき出せると思いま
す。一つの可能性は、実は敦煌の壁画にも地獄變相は有つた
んだ。しかし千幾つか有つた洞窟の、今は五百位しか残つて
いない訳で御座いますから、このいまは、絵が、残つていな
い洞窟の方には、地獄の壁画が有つたのだということも言い
うるかもしない。しかし、これは実際に現地に御出になつ
て御覧になると御分りの様に、残されている、もう潰れてい
る五百の洞窟は、殆ど壁画のない洞窟ばかりで御座います。
元々壁画が無かつたのではないかとも考えられます。そう致
しますと、次に引き出せる考え方は何かといふと、敦煌の石
窟寺院というのは、果してそういう説法の場所だつたんだろ
うか。説法をする場合には、壁画を見せて説法した訳ではな
くて、画卷を見せて、絵巻を見せて説法したのであって、從
来からいわれるよう敦煌の壁画というのは、これは壁画を
見せながら講釈した、講説したとは考えられなくなつてしま
す。壁画を用いて講經したということは、今まで何んの根拠
も無しにいわれていましたが、実はどうもそうではない様に
思われる。つまりあれだけ絵を伴つて直接的に一般に訴えれ
ることを旨と致した十王經に致しましても、地藏經に致しま
しても、その地獄の変相図というのは、壁画の中に一つも残
されていない。ということは敦煌の莫高窟そのものが、これ

が実はそういう布教説法用の場所ではなかつたと考えられる。沢田瑞穂先生はその点に關しましては、先程の地獄變の中に御座いますが、敦煌に御座います地獄變の絵が残つていい、その点に就いて若干触れられておられる。それは地獄變、變文というのは、物語的な展開をするものが、主なんであつて、地獄というのは、所謂物語はなきない。目連の様に地獄から御母さんを助け出すという話しならストーリーを持つけれども、地獄の姿そのものは、これは物語にならない。

だから物語にならないから壁画の中に画かれなくて、變文としても残らなかつたのだろう、こう言つておられます。それも一つの見方かと思われますが、だとするとこれ程沢山残つておる十王經地藏經関係の画卷本は、どういうふうにして理解するのかという点についてもう少し補足する必要があるかと思います。そこで私が本日の一つの仮説として考えますのは、敦煌の莫高窟といふのは、勿論石窟寺院で御座りますが、元来これはインドや西域に残つておりますヴィハーラ、僧院窟として出発したものではあるまいか、つまり僧侶達がある時期、或は長い時期そこに入つて生活し、禪定に入る、日常の寄宿もそこです、そういうヴィハーラ窟も、修道の場所、すなわち、禪定窟としての性格を最初は持つて出発したのではないかと考えられます。パリに残つております莫高窟記という写本が御座います。それから敦煌の現在の、石

窟寺院にもこれと同じ碑が残されております。これを見てみると、敦煌という所に何故あんなに沢山の、石を掘つた御寺が出来たかというと、樂傳という御坊さんと法良禪師といふ御坊さんが、一番最初にこの土地に仏様の姿を見て、そこで禪定をする為に石の洞窟を堀つて禪定に入つた、これが莫高窟の起りである、ということが書いて御座います。それから徐々にそういう窟が、増えていった。この伝説が、眞実かどうかは証明の限りでは御座いませんけれども、少なくとも莫高窟千仏洞といふのは、必ずしも大衆布教用の為に作られた石窟寺院として出発したのではなく、最初は、ヴィハーラとして出発し、禪定の場所であった。そしてその後に供養窟としての性格をもつようになつた。自分の身内のものや先祖を供養する為に、仏様に献上する壁画を飾つていた。だから偉い人の名前が残つてゐる窟、例えばその地方の長官なんかの作ったと思われる窟は、窟自体も大へんに広くて壁画も非常に沢山で御座います。そういう意味で、莫高窟は元來禪定の場所として始つて、それが後には禪定の他に自分の身内や自分を供養する為の供養窟としての性格へと転変していった。従つて壁画自体、勿論一般の人も見にきましたでしょうが、その前でその壁画を種にして民衆の為に布教をした、というはあまり根拠のない説とも伝えます。從来漠然とそういう説が採られていましたが、どうもそうではないように考

えられる。矢張り布教というのは敦煌十七大寺と呼ばれる現在では跡が残ってはおりませんけれども、大きな寺院に於いて行われていた。画巻、絵巻、或は經典を以つて行われていたと見るべきではないかと思います。一昨々年で御座いましたが、私、田中先生と御一緒にパリの敦煌学の会議に参りました時に、莫高窟そのものの性格というものが、どういうものなのか、ということに就いて大変内外の学者の御議論が有った様に記憶致しております。私は勿論、美術の専門家でも御座いませんので、又仏教に関しましても先程申しました通りほんの垣覗きで御座いますけれど、こういった文献資料と造形資料とが我々の目で一目で見渡せる様に、内外の交流というものが調つてしまりますと、單に敦煌学というのを一分野に限つて、仏教学は仏教学、美術史は美術史、中国学は中国学、というセクションの中にだけは留つていられない時期が来たのじやないか。少くともそれ等は敦煌全体を見る材料として考えるべきであろう。さらには中国仏教、中国文化全体見通すことに、一つの依り所を与えてくれるのではないか。最近では、このように考える様になつてきております。私、仏教の教理に関しましては誠に暗いし、況してこちらの宗門の御教理に関しましても大変に暗い人間で御座います。先生方の御満足のいく様な話しだたかどうか分りません。非常にトリヴィアルな末端の現象だけを述べた様になりました。

ただ中国の仏教の研究の一つの方法、その為の材料を御紹介したということで御承知おきを頂ければ幸いに存じます。先生方の御忌憚のない御意見を伺わせて頂きまして、今後に役立てたいと思います。御静聴有難うございました。

(本稿は、昭和五十七年六月十六日に行なわれた講演テープをもとに、金岡先生が加筆されたものです。)